

樹木いきいき講座 <その4> 3班 藤原満男

近くの川土手の法面に2メートル以上のアジサイが群生して、道路側にはみ出しています。よく見ると、長く伸びた枝が地面に接し、そこから根を張り新たにアジサイの株として生長しています。イチゴがランナーを伸ばし、太郎株（子株）・次郎株（孫株）が育つのと似ています。〔こうして植物も動く（？）のです。〕

古い庭のツバキは、近くに根から生えた株と種子から生えた実生（みしょう）が混在しています。前者は遺伝子が同じクローン、後者は父親が異なる〔花の模様などが違う〕ツバキです。混み合っていれば抜根・根から取り除くといいです。

比治山公園の道路の脇の植枘に、ドングリが落ちて実生苗が育っています。除草のついでに抜くのですが、前に切られたことがある苗は、根が張っていて道具がないと抜けません。果樹の苗を植える時に、上から三分の一切るのは根を張らせる為もあったようです。

風情があるということで、クロチク（黒竹）を植える時は鉢やコンクリートで囲い、場所を限定します。日本にあるほとんどのタケ・ササは温帯性で地下茎を伸ばします。これに対しホウライチク・スホウチクは熱帯性の竹（バンブー）で、ナンテンのように株立ち状になるので、古いのを地際で切り、新しいのを残す「更新剪定」をします。



左は日本のクロチク。右はバンブーと呼ばれる熱帯性の竹スホウチク。